

聖学院大学総合研究所

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎 1-1

Tel:048-725-5524 Fax:048-781-0421

E-mail : research@seigakuin-univ.ac.jp

HP : [https://www.seigakuin-](https://www.seigakuin-univ.ac.jp/institution/gri/)

[univ.ac.jp/institution/gri/](https://www.seigakuin-univ.ac.jp/institution/gri/)

NEWSLETTER

VOL.35, 2025

聖学院大学総合研究所

Seigakuin University General Research Institute

【巻頭言】

- 1 鄭 鎬碩 ハン・ガンの問い

【報 告】

- 2 2024年度人間福祉スーパービジョンセンター年次報告
- 5 2024年度牧会心理研究会年次報告
- 6 2024年度基礎自治体マネジメント研究会年次報告
- 12 第18-19回埼玉税法研究会
- 14 2024年度競争的資金獲得のための研修会
- 16 2024年度子どものこころと絵本研究
- 19 2024年度牧会ウインターセミナー
- 20 2024年度心理福祉学研究会（シンポジウム）
- 22 2024年度心理学研究講演会
- 23 2024年度第2回〈児童〉における「総合人間学の試み」研究会
- 26 2024年度聖学院大学総合研究所年次報告
- 31 2024年度聖学院大学総合研究所活動
- 34 2024年度心理学研究講演会 アンケート集計結果
- 36 2024年度心理福祉学研究会（シンポジウム） アンケート集計結果

巻頭言

ハン・ガンの問い

過去が現在を助けることはできるか。死者が生者を救うことはできるか。

これは、韓国の小説家ハン・ガンが、1980年に起きた光州事件（「5・18 光州民主化運動」）を扱った作品『少年が来る』の執筆に際して思い浮かべていた問いである。当初の質問は、「現在が過去を助けることはできるか。生者が死者を救うことはできるのか」だったが、世界中の国家暴力と虐殺に関する資料に取り組む中で「人間性への信頼がすっかり割れて砕ける経験」をした彼女は執筆をほぼあきらめた。ところが、光州で殺害されたある若者の日記から、「神さま、なぜ私には良心があり、こんなにも私を突き刺し、痛みを与えるのでしょうか？ 私は生きたいのです」という文章に触れた瞬間、これまでの質問を逆にしなくてはならないことが分かったという。（2024 年ノーベル文学賞受賞記念講演「光と糸」）

数々の国家暴力のトラウマが刻まれた韓国の現代史を踏まえるなら、上記の発言が単に自らの成果や著者としての権能に対する「謙った身振り」でないことは明らかだ。尚のこと、折しも韓国では、光州事件以来 44 年ぶりの戒厳令による混乱が続いており、この言葉は、「1980 年 5 月の光州が 2024 年 12 月にソウルの夜を守ってくれた」（第二次大統領弾劾訴追案の提案説明文）という認識と共鳴し、新大統領の就任演説でも引用された。確かに、今回の戒厳令が「失敗」に終わった理由を辿れば、戒厳令を受けて直ちに国会に集合した市民たち、国会議事堂のフェンスを越えた議員、不当な命令に従うことを躊躇した戒厳軍兵士たちがいた。光州と戒厳をめぐる集団的記憶が呼び起こされたことを抜きにして、彼らの行動を理解することはできない。また、現行憲法に国会議員の過半数の要求によって非常戒厳が解除されるという条項（77 条 5 項）が設けられたのも、光州及び 1987 年の民主抗争で血が流されたためである。こう考えると、ハン・ガンの問いは、韓国の政治文化における極めて生々しい「肌感覚」を捉えた言葉でもあると言える。

他方、この問いは、集合的記憶をめぐる昨今の議論を思い浮かべさせる。現在主義(presentism)と呼ばれる流れにおいては、現在における過去の構築という側面が強調されてきた。我々は、文化の枠組みの中で世界を認識する過程で必然的に過去に対する選択的な記憶を形成し、さらには現在の目的のために過去を利用する。ただ、こうした主張に対し、記憶の可変性には限界があり、驚くべき持続力をもつ記憶があるという反論がなされてきた。ハン・ガンの言葉は、これら両方の議論に潜む、記憶を「道具」、またはそれ自体として持続力を保つ「モノ」(a thing)として扱う傾向に対する反省として映る。過去に働きかける我々の能力は、ある種の「死」を前に、しばしば限界に突き当たる。我々は、助け、救う側というより、助けられ、救われることを待つ側になるであろう。だが、だからといって、私たちが受け身の立場にとどまるわけではない。ハン・ガンは、一連の講演において、「他者との接続」を強調した。すなわち、私たちは言語を通じて他者の内面に接続され、過去と出会う。ここで、歴史を扱う作家の権能や記憶の柔軟性/持続性という議論の枠組みは、創作と読書という、より広いコミュニケーションの問題系へと拡張される。過去は、「糸」のように細く、また微弱な言葉によって人と人がつながる時に「やって来る」。過去/死者による助け/救いも、著者と読者のあいだで初めて生起するのであり、まさにそのような共同性の中で、生者は「私たちとして」過去に触れ、「私たちとして」救われる可能性を手に入れる。

今回のノーベル賞受賞は光州事件の記憶の位相に大きな変化をもたらした。私たちがその記憶の共同体に加わることで「光州」の含意もまた変わったはずだ。ただ記憶が、人が過去に出会い、他者につながる果てしない出来事の連鎖である限りにおいて、「助け」や「救い」の可能性はまだ開かれたばかりであると言わざるを得ない。ハン・ガンが投げかけた問いは、暴力によって犠牲となった人々について書き、読み、互いに接続する私たちからの応答を今もなお待ち続けている。

聖学院大学 政治経済学部政治経済学科長・教授 鄭 鎬碩

年次報告

2024 年度 人間福祉スーパービジョンセンター 年次報告

はじめに

日頃より当センターの活動にご理解、ご協力賜りますことに心より感謝申し上げます。

2024 年度は、個別スーパービジョンの継続者と、新規のお申込者がコンスタントにありました。一方、グループ・スーパービジョン、ピア・スーパービジョンは事情により休会となりました。

多くの方がスーパービジョンを通して、いったん立ち止まり、日々のクライアントとのかかわりを、または職員とのかかわりを振り返り、実践者としてのありようを模索し、また明日も頑張ろうという勇気づけられるときを得られたのであれば幸いです。

今から 17 年前の 2008 年 3 月 1 日に「聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター発足会」を開催いたしました。その日の報告書「スーパービジョンへの誘い～聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター発足会報告集～2008.3.1」を久しぶりに開きました。

当日は柏木昭先生に「スーパービジョンとはなにか」と題してご講演をいただき、その後、卒業生 3 名によるシンポジウム「今、実践の中で困っていること、そしてスーパービジョンセンターに期待すること」を行いました。

シンポジウムの最後に、ある卒業生からのメッセージを紹介しました。

「実は出席するつもりでいたのですが、うちの所長に急に研修内容は施設の業務と直接関係がないので有給にはできないと言われてしまいまして、出席できなくなっていました。いくと言っておきながら本当に申し訳ありません。僕たちは権利としての有給ですら使えない劣悪な環境で働いています。きつい労働時間、怪我や精神的な病になる可能性、職場の先輩方の利用者に対しての言葉、いつまでもたってもボランティア色が抜けない低賃金などなど、例を挙げればキリがないです。夢とやる気に満ち溢れた若

い力がどんどん現実を見て福祉から離れていきます。こんなことで明るい福祉の未来はないと感じています。それと同時に、愚痴ばかり言っても何も変わらない、自分たちで変えていかなければと最近は感じられるようになってきました。だからこそ、今、スーパービジョンセンターの発足、とても嬉しかったです。みんなで共通の悩み、問題に立ち向かってゆき、福祉の世界を変えるようなセンターになってほしいです。発足会の成功を心よりお祈りしています。」

こうして悩む卒業生や福祉実践者に、当センターのスーパービジョンが届いたでしょうか。

そして、このときから福祉をめぐる状況は変わったのでしょうか。

発足当初は、スーパービジョンが定着することで福祉現場のこうした状況を変えていこうとする思いがあったことを思い出しました。

今年度も多くの方々のご尽力により運営できましたことを心より感謝申し上げます。

私ごとではありますが、今年度をもって本学を退職することに伴い、当センター運営からも退くこととなりました。発足からかかわらせていただき、多くの皆様のお支えとお力に改めて感謝申し上げます。

2025 年 3 月

聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター
センター長 相川 章子

I. 事業概要

1) 目的

社会福祉の現場では、日々、さまざまな戸惑い、失敗、ゆれに直面することは少なくない。不安を抱えて仕事を続けるのではなく、壁を乗り越え、燃え尽きない（バーンアウトしない）ための方法として、「スーパービジョン」がある。

スーパービジョンとは、スーパーバイザー（熟練したソーシャルワーカー）が、スーパーバイジー（経験の浅いソーシャルワーカー）に対し、その人の能力が最大限に引き出され、より良い実践ができるよう支援するソーシャルワーカー同志の肯定的なかかわりである。

2) 実施体制

スーパービジョンセンター委員

センター長・委員長：相川章子

委員：小沼聖治、田村綾子

顧問：牛津信忠、助川征雄、中村磐男

3) プログラム

○ 個別スーパービジョン

スーパーバイザーによる個別のスーパービジョン（原則毎月1回程度）

○ グループ・スーパービジョン

スーパーバイザーによるグループ・スーパービジョン（年5回程度）

○ 研修交流会 ピア・スーパービジョン

主にスーパービジョンに関する実践理論の勉強や経験交流の場を提供する研修会（年1～2回程度）

○ スーパーバイザー支援制度、同グループ版

すでにスーパービジョンを行っている人をサポートする制度

<スーパーバイザー>

相川章子（精神保健福祉士）：聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科教授、同大学人間福祉スーパービジョンセンターセンター長、同センター委員会委員長
大野和男（社会福祉士・精神保健福祉士）：NPO法人ドレミファ会副理事長、公益社団法人日本精神

保健福祉士協会相談役、元聖学院大学非常勤講師

小沼聖治（社会福祉士・精神保健福祉士）：聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科准教授、公益社団法人日本精神保健福祉士協会認定スーパーバイザー

助川征雄（精神保健福祉士）：聖学院大学名誉教授、全国精神保健福祉相談員会相談役

田村綾子（社会福祉士・精神保健福祉士）：聖学院大学副学長、同大学心理福祉学部心理福祉学科教授、同学部長、公益社団法人日本精神保健福祉士協会会長、同法人認定スーパーバイザー

廣江 仁（精神保健福祉士）：社会福祉法人養和会理事長、元聖学院大学非常勤講師、公益社団法人日本精神保健福祉士協会理事、同法人認定スーパーバイザー

行實志都子（社会福祉士・精神保健福祉士）：神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部社会福祉学科教授、公益社団法人日本精神保健福祉士協会理事、元聖学院大学非常勤講師

<コーディネーター>

牛津信忠：聖学院大学名誉教授

中村磐男：聖学院大学名誉教授

II. 事業実績

1) スーパービジョンセンター委員会

第1回委員会：5月22日（水）10：40-12：00

開催方法：Zoom

出席者：相川章子、牛津信忠、助川征雄、小沼聖治

欠席者：田村綾子、中村磐男

事務：菊池美紀（記録）

第2回委員会：3月6日（水）10：00-11：00

開催方法：Zoom

出席者：相川章子、牛津信忠、助川征雄、田村綾子、小沼聖治

欠席者：中村磐男

事務：菊池美紀（記録）

2) スーパービジョン事業

(1) 聖学院大学グループ・スーパービジョン

※2024 年度は開催せず。

(2) 個別スーパービジョン

＜相川章子＞ 延べ 17 回 人数：3 名

＜大野和男＞ 延べ 4 回 人数：1 名

＜田村綾子＞ 延べ 1 回 人数：1 名

＜廣江 仁＞ 延べ 12 回 人数：2 名

計 延べ 34 回 人数：7 名

(3) スーパーバイザー支援制度

＜田村綾子＞ 延べ 2 回 人数：3 名

(4) ピア・スーパービジョン

※2024 年度は開催せず。

3) 書籍発行

2019 年度（2020 年 2 月 15 日）に開催したピア・スーパービジョンでの対談をベースとした書籍が出版会より発行された。

聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター編、柏木昭、相川章子、牛津信忠著 『対等な“かかわり”そして“ピアサポート”へ』（人間福祉スーパービジョン研究 3）
聖学院大学出版会 2025/4/10

報告者：相川章子 [あいかわ・あやこ]
前人間福祉スーパービジョンセンターセンター長
埼玉県立大学保健医療福祉学部教授

年次報告

2024 年度 牧会心理研究会 年次報告

この「牧会心理研究会」では、牧師を始めその周辺で働く専門家が集まり、牧会のただ中でおきている話題や事例を取り上げ、討議を行っている。第三者的に眺めるのではなく、毎回、現在進行形で関わっている話題や事例を取りあげている。ひとつの事例につき、2 時間少しの時間をかけ、全員が発言できるように配慮し、自分の経験を分かち合い、様々な知恵や視点を共有している。

1. 第 1 研究会の日程

※いずれも 2 時間半、登録者数 12 名

- (1) 第 1 回 日時：2024 年 5 月 30 日 (木)
- (2) 第 2 回 日時：2024 年 11 月 14 日 (木)
- (3) 第 3 回 日時：2025 年 2 月 13 日 (木)

2. 第 2 研究会の日程

※いずれも 2 時間半、登録者数 15 名

- (1) 第 1 回 日時：2024 年 5 月 31 日 (金)
- (2) 第 2 回 日時：2024 年 10 月 25 日 (金)
- (3) 第 3 回 日時：2025 年 2 月 14 日 (金)

3. 話し合われた内容等

2024 年度も、二つの研究会ともに、従来通りのスタイルで牧師として直面している問題を語り合った。

なお、筆者なりに研究会で話し合われた事柄で印象に残ったものを述べたい。

まずコラージュ作りの発表が初めて行われたことである。このときは、話題提供者ご自身が自分のメンタルヘルスのためにコラージュ作品を作り続けており、その作品を時間順に味わい、心の変遷が語られた。コラージュというのは、台紙に不要雑誌から好きな写真を自由に切り取り、自由に貼り付ける方法である。そしてその作品を見た他の人たちと感想を分かち合うのである。近年カウンセリングの世界で普及し、愛好者が増えている。

本研究会は、決して最先端の方法を採り上げることを意図していないが、コラージュという方法に接することは新鮮で、言外の思いもくみ取るもので、興味深かった。

またもう一つ印象に残ったものがあった。それは、いくつか

の事例で依存症者が登場し、また依存症者の治療施設が登場し、依存症者のための集会在登場したことである。旧約聖書の時代から、アルコール依存症の記述が見られるという。他罰の傾向が強く、自助グループの有効性などどこか犯罪者に通じるものが多く見受けられた。依存症の相談機関や施設は探すといくつもあり、危機介入的に滞在出来るものもある。民間の施設の場合、キリスト者が使命感から創設したものもある。ただ依存症にしても犯罪にしても自分の生き方の根本的な所を変えることなくして問題行動は変えられない。彼らの抱える問題を把握してもそれ以上進めない。

筆者は、依存症者の自助グループと、コラージュ作りとは、「聞き放し、話し放し」のルールがあるなどして、あらかじめ本音の世界を分かち合い、引き出し合うところに、似た魅力を感じた。

新年度も、事例を基に、参加者の知恵を分かち合うスタイルで、研究会を続けて行く予定である。

報告者：藤掛明 [ふじかけ・あきら]

聖学院大学総合研究所客員教授

牧会心理研究会代表

年次報告

2024 年度 基礎自治体マネジメント研究会 年次報告

1. はじめに

四半世紀近く前に、地方分権改革が実現し、地方自治体が国から制度的に自立したものの、多くの基礎自治体は、日々押し寄せる課題への対応に追われるなど、様々な要因によって未だに国への依存から脱却できておらず、真の地方自治を実現していくには、自治体自身の努力は勿論、学問的分野からの支援が必要不可欠な状況にある。一方、学校教育法の改正により、大学の使命に「研究」「教育」「社会貢献」が明記され、本学としても持てる資源を活用して、地元・地域の社会資本としての貢献が求められていることを踏まえて、2021 年度、「基礎自治体マネジメント研究会」を発足し、本年度も、基礎自治体におけるマネジメントの現状とその在り方に関する実務的研究を継続している。



会場の様子

2. 2024 年度の主要活動

(1) 基礎自治体 若手・中核人材育成プログラム

昨年度に引き続き 2024 年度も、多くの基礎自治体が、喫緊の課題として対応を迫られている、組織の担い手たる人材の育成を支援する社会貢献を担うと共に、同時に、現場の実情把握・研究に資することを狙い『基礎自治体 若手・中核人材育成プログラム』を開催した。

本プログラムは、①組織・人事マネジメントコース②政策マネジメントコース③財政マネジメントコースに分かれ、

全体講義とゼミ活動とでカリキュラムを構成しており、毎月 1 回（土曜の午後）計 10 回の定例会を開催した（詳細は、別記の通り）。

プログラムには、従前から包括連携協定を締結していた、さいたま市、上尾市、桶川市、春日部市、川島町、吉見町、鳩山町、嵐山町、滑川町、小川町、ときがわ町、東秩父村及び、2022 年度に包括協定を締結した釜石市に参加者の推薦を依頼し、9 団体から将来を担う 13 名の参加申し込みを得、2024 年 5 月 25 日に第 1 回定例会を開催した。その後は、毎定例会での講義に加え、参加者自身がそれぞれの実務的研究テーマを設定して研究を進めた。2025 年 3 月 8 日の最終（第 10 回）定例会は、本学チャペルにおいて研究発表会として開催した（詳細は別記の通り）。

研究発表会 第 1 部では、小池茂子学長の開会挨拶の後、聖学院教会オルガニストの山田志帆氏により、パイプオルガンの演奏（バッハ「トッカータとフーガニ短調よりトッカータ」他、全 4 曲）が行われた。その後、猪狩廣美研究代表が、「人口減少社会をどう乗り切るか——住民のウェルビーイング向上を維持するために」と題して基調講演を行った。

第 2 部では、諸般の事情で中途休学した者を除く 10 名が研究発表を行い、各推薦自治体から、吉見町宮崎善雄町長、東秩父村高野貞宜村長、鳩山町小川知也町長、ときがわ町渡邉一美町長、川島町飯島和夫町長をはじめ、副市町長、人事担当等幹部職員の参加を頂き、職員のプレゼンテーションに対して激励のコメントを頂いた。4 時間を超える長時間の催しとなったが、充実した意義深い第 4 期生の発表会となった。

この研究発表会には、第 1・2・3 期生（G フェロー）も駆けつけ、後輩たちにエールを送ってくれた。

従事研究員：石塚敏之、池田洋子、
浦田寛士、津曲達也、
長嶋佐央里、猪狩廣美

（２）研究員定例研究会・Gフェローミーティングの開催

本年度は、研究員による研究会を定期的に行き、時宜に叶った研究テーマを取り上げ、研究を深めることとした。一方、第1・2・3期の育成プログラムの修了後も引き続き学び続ける意思を有する修了生を、本研究会のGフェローに任命したが、第2～9回までの各回研究会は、Gフェローミーティングとの同時開催として、Gフェローにも参加を呼びかけ、少数の参加ではあったが研鑽を深める機会にすることができた。また、本年度は、臨時研究会として、7月13・14日には岩手県釜石市を（4期生及びG・フェローも参加）、7月26日には茨城県つくば市を、11月19日には東京都港区をそれぞれ行政視察し、研究を進めた（研究テーマは、別記の通り）。

3. 終わりに

本年度の本研究会活動も順調に展開することができた。また、本年度も、遠方の釜石市からの受講生が、ほぼ毎回日帰りで参加し、充実した研究成果を上げてくれたことには、改めて敬意を表したいと思う。更に最終日の研究発表会に、5名の首長が多忙の中ご出席くださり、激励のメッセージを述べてくださったことも、参加者にとってもこの上ない励みになったと思う。重ねて感謝申し上げたい。

文末になってしまったが、担当した研究員諸氏の献身的な努力は勿論のこと、様々な形で取り組みを支えてくださった、小池茂子学長、八木規子政治経済学部長、そして、総合研究所事務局及び大学総務課他の皆さん及び関係諸氏に、改めて心からの感謝を申し上げ、今後も地域自治体との連携強化に資していくことで、お礼に代えさせて頂きたいと思う。引き続きご支援賜うようお願いして、本年度の活動報告とする。

報告者：猪狩 廣美 [いがり・ひろみ]

聖学院大学政治経済学部政治経済学科特任教授、
基礎自治体マネジメント研究会 研究代表



発表会の様子



発表会登壇者



左から

猪狩廣美特任教授（研究代表、政策マネジメントコース、
財政マネジメントコース）
長嶋佐央里准教授（財政マネジメントコース）
池田洋子研究員（組織・人事マネジメントコース）
浦田寛士研究員（政策マネジメントコース）

基礎自治体マネジメント研究会 2024 年度 研究報告

1. 「基礎自治体 若手・中核人材育成プログラム」の開催

設定コース：「組織・人事マネジメントコース」「政策マネジメントコース」「財政マネジメントコース」の3コースを設置

対象自治体：包括連携協定を締結している13自治体

参加自治体：上尾市、桶川市、釜石市、吉見町、鳩山町、川島町、小川町、ときがわ町、東秩父村の3市5町1村

修了者：10名（組織・人事3名、政策5名、財政2名）

開催内容：毎月1回、計10回の定例会を開催、土曜の午後4時限で構成（詳細は下表の通り）

2024年度 若手・中核人材育成プログラム 活動内容

	月	日	時限	科 目	内 容
第1回	5	25	1	開講	開講セレモニー、自己（自治体）紹介
			2・3・4	全体ワーク	「地方創生」に関するワーク
第2回	6	15	1	ガイダンス	
			2	組織・人事	人事政策の役割と目指すもの ～人材マネジメントサイクル～
			3	政策	「政策管理(実施)」から「政策マネジメント(成果)」へ ・公共政策(自治体政策)とは ・政策マネジメントの概要 ・政策課題の発見方法Ⅰ(現状把握手法)
			4	財政	制度としての地方財政 ・地方財政とは ・国と地方の財政関係 ・地方財政制度の仕組み ・近年の地方財政計画の動向と地方自治体の財政運営への影響
第3回	7	20	1	組織・人事	職責と職務能力基準 ～人事育成モデルと職務能力の涵養～ ・職務・業務・職責・サービス ・リーダー・マネージャー・プレイヤー ・職と職務遂行能力基準 ・意欲ベクトルと成果 ・「能力の窓」とブレイングマネージャー ・HRM
			2	財政	地方自治体の財政運営 ・財政状況を見るための資料 ・財政状況を見る指標 ・地方公会計の活用
			3	政策	「政策管理(実施)」から「政策マネジメント(成果)」へ ・政策課題の発見方法Ⅱ(何を政策課題とするか：政策課題の定立&フレーミング)
			追	自主研修報告	7月13日～14日 釜石市行政視察報告
			4	分野別ゼミ	

	月	日	時限	科 目	内 容
第4回	9	14	1	政策	「政策(事務事業)プランの立案」 ・政策体系について(立案の前提として、位置づけの確認) ・研究テーマ(政策課題)の整理を確認 ・取組む(解消す)べき要因を選択 ・要因解消のための取組み(事務事業)プランの立案 ・事務事業計画(企画書)の作成
			2	組織・人事	モチベーションマネジメント ～マネジメントツールとしての人事評価制度～ ・モチベーション・モチベーション理論 ・「人的資本理論」とモチベーションマネジメント ・能力及び実績に基づく人事管理の徹底 ・人事考課制度(事例：東京23区) ・地方公共団体における今後の人材育成
			3	財政	「日々の仕事と財務会計制度」 ・日々の仕事とかかわりの深い「財務会計制度」 ・財政マネジメントの守備範囲 ・予算事務について ・契約事務について ・会計事務について ・財産管理事務について ・財務会計の各制度に関わる検討課題 ー健全性を希求しつつ、負債ができない・し難い・判明する仕組みを目指してー
			4	分野別ゼミ	
第5回	10	19	1	政策	「合意形成を図っていくプロセス」 ・庁内の合意形成 ・議会での合意形成 ・住民の合意形成
			2	財政	地方財政改革 ・公会計改革への対応 ・公契約条例への対応を巡る動きについて
			3	組織・人事	組織と人事実務 ～公務のプロ集団を創る人事実務のヒント～ ・組織とは ・「人事・労務管理」の視点 ・「人事・労務管理」の4つの側面 ・管理監督者の役割
			4	分野別ゼミ	
第6回	11	9	1	政策	「実行(執行)していく際のプロセス・マネジメント」 ・「ヒト」のプロセス・マネジメント ・「財」のプロセス・マネジメント ・「事務事業」のプロセス・マネジメント 「取り組みを振り返る行政評価(その手法と活用)」 ・行政評価の3つの要素 ・行政評価の課題と意義 ・改めて、政策マネジメント・サイクルを確認
			2	組織・人事	イノベーションマネジメント ～実践から紐解く「課題に立ち向う！」ヒント～ ・イノベーションとは ・「ゆいの森あらかわ」で経験したこと ・「セレンディビティ」
			3	財政	公共施設の管理運営 ・直営・業務委託と指定管理 ・公共施設等総合管理計画と直面する老朽化対策 財政マネジメント全体講義の振り返り
			4	分野別ゼミ	
第7回	12	14	1	全体講義	政策マネジメント特別講義 「『検証』(仮称)つくば市総合運動公園整備事業はなぜとん挫したのか」
			2・3・4	分野別ゼミ	
第8回	1	11	1	全体講義	特別講義 「東日本大震災からの創造的復興に向けた取り組みについて」 ゲスト講師：釜石市総務課長 金野尚史氏
			2・3・4	分野別ゼミ	
第9回	2	8	1	全体講義	「基礎自治体マネジメント論の振り返り」
			2・3・4	分野別ゼミ	
第10回	3	8	1～4	研究発表会	

2. 「個別課題 研究会」の開催（※は、修了生で構成する「G・フェローミーティング」と同時開催）

毎月1回を月例として、研究員による研究会を開催した。各回のテーマは以下の通りである。

なお、第2回から第9回までは、G・フェローミーティングとの同時開催とした。

第1回	5月25日	午前	2024年度「基礎自治体 若手・中核人材育成プログラム」の進め方について
第2回	6月15日	午前	「今国会に提出されている地方自治法改正案とその影響について」※
臨時研究会①	7月13-14日		釜石市 行政視察
第3回	7月20日	午前	「昨年度末に総務省が発出した『人材育成・確保 基本方針策定指針』について考える」※
臨時研究会②	7月28日		つくば市 行政視察
第4回	9月14日	午前	「基礎自治体の管理職(チームリーダー)に求められるもの」「自治体職員の育成・成長に関して、大学が担い得ること」※
第5回	10月19日	午前	「東京都カスタマーハラスメント防止条例(仮称)の基本的な考え方」について※
第6回	11月9日	午前	「G・フェロー ミーティングのアクティブ化に向けて」※
臨時研究会③	11月19日		東京 港区 行政視察
第7回	12月14日		「人口減少社会にどう向き合うか」※
第8回	1月11日		「自治体広報の役割と課題」※
第9回	2月8日		「投票率向上に向けた課題と対策」※

基礎自治体マネジメント研究会
2024 年度「基礎自治体 若手・中核人材 育成プログラム」研究発表会

第一部

学 長 挨 拶	小池茂子（聖学院大学 学長）
パイプオルガン演奏	山田志帆（聖学院大学 オルガニスト）
	バッハ：トッカータとフーガ ニ短調より トッカータ
	バッハ：G 線上のアリア
	バッハ：カンタータ 106 番より シンフォニア
	ボエルマン：ゴシック組曲より トッカータ
基 調 講 演	猪狩廣美（聖学院大学大学院・同大学政治経済学部 特任教授 総合研究所基礎自治体マネジメント 研究会代表）

『人口減少社会をどう乗り切るか ――住民のウェルビーイング向上を維持するために』

第二部

2024 年度基礎自治体マネジメント研究会活動報告
池田洋子（基礎自治体マネジメント研究会 研究員）

研 究 発 表

宇梶 柊（吉見町）[政策]	吉見町における空き家問題について
渡辺 要（東秩父村）[政策]	間伐がもたらす森林機能の向上と木材利活用の可能性について
＜コメント＞	
石井麻友美（鳩山町）[組織・人事]	働き続けたい職場であるために
馬場拓也（ときがわ町）[財政]	通学路の安全性向上と財源の確保について
＜コメント＞	
中川知子（川島町）[財政]	維持管理の簡素化に向けて
嶋崎将希（川島町）[組織・人事]	若手・中核人材の離職――働く現場に寄り添った職場の重要性
＜コメント＞	
佐々木美咲（釜石市）[組織・人事]	協働する組織へ
――変化に適応し、安定した市民サービスを提供するために	
竹内友梨（桶川市）[政策]	桶川市における人口減少の抑止について
＜コメント＞	
飯塚洋生（小川町）[政策]	町の疾病状況に関する研究と健康課題解決に向けた施策の提案
鈴木健太（上尾市）[政策]	良好な地域コミュニティの形成に向けた支援について
＜コメント＞	

総 評 八木則子（聖学院大学 政治経済学部長）
閉会の辞 猪狩廣美

[政策].....	政策マネジメントコース
[財政].....	財政マネジメントコース
[組織・人事]...	組織・人事マネジメントコース

報 告

第 18-19 回（2024 年度） 埼玉税法研究会

【第 18 回】

開 催 日：2024 年 5 月 18 日（土）13：00～16：50

会 場：ヴェリタス館教授会室

講 師：野田扇三郎（聖学院大学大学院政治政策学研究科客員教授・埼玉税法研究会代表）

参加人数：68 名

【第 19 回】

開 催 日：2024 年 11 月 9 日（土）10：00～14：20

会 場：4401 教室

参加人数：28 名



講演者：野田扇三郎客員教授

1. 第 18 回埼玉税法研究会

第 18 回埼玉税法研究会は、2024 年 5 月 18 日（土）、13 時 00 分から 16 時 50 分まで、ヴェリタス館教授会教室で行われた。

第 1 部は、野田扇三郎政治政策学研究科客員教授（埼玉税法研究会会長）の基調講演で、テーマは「税理士としてどう生きるか！」である。概要は以下の通りである。

日本の税理士制度は税務代理士制度（昭和 17 年）を起源とするが、税理士法制定（昭和 26 年）において、税理士の使命（納税義務の適正な実現）、業務範囲（税務代理・税務書類の作成・税務相談）、試験制度などが定められた。書面添付制度（平成 23 年）

は、税理士の使命を果たす上で重要な仕事となるだろう。有望な職務領域としては、関与先が中小零細企業であれば承継税制（土地・非上場株式の評価実務）、大企業であれば組織再編（適格税制）や国際課税（海外展開への助言）などを挙げることができる。どの領域でも、変化を読んで「先回り指導」をすることが大切である。単なる入力作成や、ごく一般的な（税務大学のテキストに書いてあるような）税務相談などは、AI に浸食されるだろう。他方、税理士業界のダークパターンとして、ネット上での安価広告や You Tube などによる「節税ネタの解説」なども目立つようになった。税理士の懲戒事例には、①故意による不真正税務書類の作成、②自己脱税、③多額かつ反職業倫理的な自己申告漏れ（申告期限の徒過）、④非税理士に対する名義貸し・にせ税理士行為、⑤使用人等に対する監督義務違反、⑥税理士法人の社員税理士が違法行為をした場合の他の社員税理士の責任（内部管理体制の欠如）、などがある。④顧客の記帳代行を行っている非税理士の会計法人が申告書の作成を行えば税理士法 52 条違反（にせ税理士行為）であるが、その申告書に税理士が署名して税務署に提出すれば同法 37 条の 2 違反（名義貸し行為）となる。⑤税理士が事務員に業務を任せきりにして（たとえばその事務員が従前の勤務先から移してきた顧客に関する業務）、事務員が作成した税務書類が不真正なものであることを見落としたまま署名して税

務署に提出した場合は 41 条の 2 違反（監督義務違反）となる。このような事例は実際にも相当件数が多いと思われ、当局でも注目している。また、多くの税理士は保険に入っているが、税賠償事案をみると、消費税では簡易課税や課税事業者の選択等に関する届出書の提出失念、法人税では事前確定届出給与に関する届出書の提出失念などが多い。注意が必要である。関与先との契約において損害賠償額の上限を保険金額とする「責任制限条項」を定めることも多いと思われる。ただし、個人の相続税申告の事案について、消費者契約法 10 条を適用して責任制限条項を無効とした東京高等裁判所の裁判例がある。税理士として「生きる」うえで、税理士事務所や大手税理士法人に勤務することにはメリット・デメリットがそれぞれあるが、「自分にあった仕事のスタイルが可能（ワークライフバランス）」という点で独立開業を勧めたい。

第 1 部の参加者は、外部 31 名（内修了生 19 名）、1 年次生 9 名、2 年次生 8 名、教員 7 名、職員・RA3 名、総計 58 名であった。

第 2 部は院生による修士論文構想報告会で、参加者は、1 年次生 9 名、2 年次生 8 名、外部 6 名、教員 6 名、職員・RA3 名、総計 32 名だった。

2. 第 19 回埼玉税法研究会

第 19 回埼玉税法研究会「修士論文構想報告会」は、2024 年 11 月 9 日（土）、10 時 00 分から 14 時 20 分まで、4401 教室で行われた。

参加者は、院生 16 名（1 年次生 9 名・2 年次生 7 名）、教員 6 名、職員・RA3 名、外部見学者 3 名の合計 28 名であった。

開会に当たっての八木規子研究科長の開会挨拶では、「特に 2 年次生にとって、この 11 月の時期に行う発表は重要な意味をもつ。先生方からコメントをいただいたら、それをメモして、発表会の終了後に個別に補足質問をするなりして、修論へ反映してもらいたい。論文提出締め切りの 1 月まで、集めた資料にどう論理を与えるか、答えが“ふってくる”まで寝ても覚めても考える。苦しいけれども、そんなふうに関心を追いつめていかないと論文は書

き上げられない。ぜひ今日の報告会を貴重な機会として生かしてほしい」という趣旨のお話があった。

院生 1 人当りの時間配分は、2 年次生は発表 10 分・質疑 10 分、1 年次生は発表 2 分・質疑 2 分とした。午前の部（10：10～12：30）は 2 年次生 7 名、午後の部（13：30～14：10）は 1 年次生 9 名、というスケジュールである。

税法専門の教員として野田扇三郎客員教授、橋本秀法特命教授、堀江知洋特命教授の 3 名体制で、それぞれ自分の指導担当者以外の院生の発表に対してコメントをして頂いた。

3. 追記

野田扇三郎客員教授は 2024 年度をもって退任された。2016 年度の着任以来 9 年、野田先生が直接に論文指導をされた院生は 31 名に及ぶ。その豪放磊落なお人柄は多くの院生に慕われていた。第 18 回の講演会は野田先生の最後の講演会ということで、指導を受けた 31 名のうち、既に税理士として活躍中の修了生 11 名と、税理士試験の科目合格要件を充たして審査手続中の終了生が 1 名、あわせて 12 名が来場された。この場を借りて、野田先生に厚く御礼申し上げたい。

報告者：木村 裕二 [きむら・ゆうじ]

聖学院大学大学院政治政策学研究科特任教授



会場の様子（第 19 回）

報 告

聖学院大学総合研究所 競争的資金獲得のための研修会主催

2024 年度 競争的資金獲得のための研修会

開 催 日：2024 年 7 月 10 日（水）教授会終了後 18：20～19：30

会 場：ヴェリタス館教授会室

講 師：春木育美（聖学院大学政治経済学部教授）

渡邊孝継（聖学院大学心理福祉学部准教授）

参加人数：19 名

2024 年 7 月 10 日（水）に総合研究所及び研究推進委員会主催による「2024 年度競争的資金獲得のための研修会」が教授会室において実施された。会の冒頭に西村洋一先生（副学長・心理福祉学部教授・研究推進委員長）より主旨説明がなされ、本学における研究水準の向上と研究環境の活性化を進めるため、競争的資金獲得経験者によるノウハウの共有を目的とする研修である旨の説明がなされた。当日の参加者は、登壇者・事務職員を含めて 19 名であった。

本年度研修会では、講師として科研費獲得のご経験のある渡邊孝継先生（人文学部准教授）と春木育美先生（政治経済学部教授）にご登壇いただき、競争的資金獲得申請の際のノウハウについてご教授いただいた。

渡邊先生からは、科研費申請における前提条件について、審査区分となる①学術的重要性、②方法の妥当性、③研究遂行能力それぞれの平均点について 3 点以上を目指す必要があることが確認された。そして、平均点を向上させるポイントとして、調書作成における「概要」、「研究課題の学術的重要性」、「研究方法の妥当性」についての具体的な対策を示していただいた。中でも、調書「概要」については、専門分野の異なる審査委員が短時間で読んだ際にもスムーズに理解できるよう、専門用語を説明しながらわかりやすく記述する必要がある点が強調された。そして、調書作成過程において作成者自身による点検作業は限界があるため、研究者同士のピア・レビューが重要となることや、研究支援課からの申請支援をキャッチすることの必要性が確認された。また、採択率の

高い研究者の多くが申請のための準備を早くから進めており、申請に向けた初動の重要性についても共有していただいた。



発表者：渡邊孝継准教授

春木先生からは、これまでに獲得された多様な競争的資金と具体的な研究課題を共有いただいた上で、市販の申請ガイドブックの多くが理系申請者を対象としたものであるため、身近な研究者仲間からのアドバイスがより効果的な場合も多くあったという経験についてご紹介いただいた。そして、申請の際に重要なポイントとなる学術的「問い」の設定について解説いただき、申請課題の社会的意義を審査委員に積極的にアピールする核心部分として学術的「問い」の明確化について確認いただいた。また、研究課題の着想に至った経緯について記述する際には、個人的なエピソードなどを効果的に記載することによって、研究者としての着眼や発想の豊かさをアピールすることにつながる点が紹介された。研究遂行能力に関する

記述についても、蓄積されたこれまでの研究成果が申請研究課題のベースとなっていることを示しながら、「既に研究を進めてきているが、もう一押しあればさらに研究が進み、完成する」といった点を強調することが必要であるとのことであった。また、これまでの申請に際しての反省点も共有いただき、為替レート変動の影響を受ける海外研究課題については、それを見越した申請金額の増額が必要である点や、研究期間を必ずしも3年とする必要がない点についても情報共有いただいた。



発表者：春木育美教授

その後の質疑応答でも活発な意見交換がおこなわれたが、特に申請課題の「独創性」の発見方法については、日頃の研究蓄積の成果が新たな独創的課題の発見につながったとのご経験や、先行研究のレビューを積極的におこなうことによって解決されるべき課題を発見し、自身の新たな着眼点を獲得されたご経験など、大変示唆に富んだ議論が交わされた。研究者としての自身の研究姿勢をあらためて見直す機会となったと共に、多くの新たな学びと発見が得られた貴重な研修会となった。

報告者：今井 勇 [いまい・たけし]
聖学院大学人文学部准教授

報 告

聖学院大学総合研究所 子どものこころと絵本研究主催

2024 年度 子どものこころと絵本研究
世界のバリアフリー児童図書展と講座を開催して

開 催 日：世界のバリアフリー児童図書展 2025 年 1 月 6 日（月）～11 日（土）

講座 1 2024 年 12 月 14 日（土）13：30～15：00

講座 2 2025 年 1 月 11 日（土）10：00～11：00

会 場：聖学院大学総合図書館

講 師：講座 1 尾鷲瑞穂（国立環境研究所環境情報部サブジェクトライブラリアン・聖学院大学非常勤講師）

講座 2 攪上久子（世界のバリアフリー児童図書展実行委員長・女子美術大学非常勤講師）

参加人数：講座 1 20 名、講座 2 24 名

2025 年 1 月 6 日から 1 月 11 日に聖学院大学総合図書館で「世界のバリアフリー児童図書」展を開催した。IBBY 国際児童図書評議会が 2023 年度に選定された 40 作品（22 の国と地域からの推薦図書）の巡回展示会である。埼玉県内での開催は約 20 年ぶりとのことである。また、2 つの関連講座も開催した。この事業は「2024 年度学長裁量経費事業 採択 24-05」によるものである。



展示の様子

IBBY（1953 年設立）は、現在 85 の国と地域が加盟して、子どもと本をつなぐ活動を世界平和に結んで展開している。子どもの本を通して国際理解を深めることを使命とする。第二次世界大戦後、イエラ・レップマン（1891-1970）らの発起による世界 20 カ国の児童書の展示会開催と国際児童図書館開設（1949 年）が活動の始まりにある。

IBBY 障害児図書資料センター（1985 年設立）は、40 以上の言語の、4000 点を超える資料を所蔵する。各支部からの推薦図書から展示する本を選んで、目録 *IBBY Selection of Outstanding Books for Young People with Disabilities* を隔年で発行している。2013 年から、IBBY は、異なる言語の人たちが共に楽しめる Silent Books（文字のない絵本）の展示会も、隔年で開催している。

IBBY 日本国際児童図書評議会は「世界のバリアフリー児童図書」の展示会を 2003 年から開いている。「障害児のための本」とせず「バリアフリー児童図書」とある。目録が示す通り、障害を「医学モデル（個人モデル）」に偏らず「社会モデル」に考慮して、社会生活への参加を制約しない環境づくりに向かうことに本意がある。子どもの本の交流は、子どもの権利に通じあう。

目録と展示は 2 つのカテゴリーで構成される。I Accessible Books（12 点）と II Portrayals of Disability（28 点）である。

カテゴリー I は、読書体験に参加を開く工夫がある。点字つき、手話つき、大きな活字、音声つきの本、触素材を貼ったさわる本、写真や絵を用いて絵記号やふりがなをそえるなどのやさしく読める LL（Lättläst）ブックがある。『クッキーづくりの仕事 洋美さんの 1 日』（季刊『コトノネ』編集部 構成ほか、埼玉福祉会、2018 年）、『りんごだんだん』（小川忠洋 文・写真、あすなろ書房、2020 年）もあった。

さまざまな手法を組み合わせ、読むことのアクセスを一律に限定しないユニバーサルデザインのコンセプトにふれ

る機会になった。さわる絵本は、絵と文字の絵本とはちがう印象になり、読み方が変わって面白い。手作りの作品もあり、表現の豊かさに驚いたと感想が寄せられた。

カテゴリーⅡは障害が描かれた本である。『わたしが障害者じゃなくなる日』（海老原宏美 著、シライケン 絵、旬報社、2019 年）は、カテゴリーⅠだがⅡにも重なるように思えた。海老原さんの軽妙な語り口に親しみやすさを感じた。また、苦手な外国語の本でもなぜか読み通すことができたとの感想もあった。障害という難しい問題をやさしく描いた本には、人と人のつながりを感じて身近なことに考えてみることに誘う力があるようだ。

本学の留学生の協力により、『冬夜説書人』（徐魯文、王祖民 王鶯 絵、明天出版社、2018 年）の試訳を本学での展示に添えた。



講師：尾鷲瑞穂先生

図書展に合わせて、2つの関連講座を開いた。

講座1は、「6つの点に込められた想いー点字・点訳絵本の可能性ー」（講師 尾鷲瑞穂氏、12月14日、聖学院大学総合図書館1階）である。

ルイ・ブライユ（1809－1852）が考案した点字（braille）は、1マス6点（横2点、縦3点）の表音文字である。五十音式の考案は、石川倉次（1859－1944）による。点の大きさと幅はJIS規格で定められている。読むときは文字列を左から右に辿っていくが、打つときは逆に右から左に進む。

ワークでは、一覧表を見ながら点字器を使って打ってみた。字を反転させて、逆方向に、一点一点を裏面に打っていく。目と手の動きに一字ずつの声も合わさり、紙の面に点字が現れ出てきた。点字の習得はなかなか難しい。

点訳絵本は、点字を打った透明シートを貼付して絵を損なわないように工夫している。点字つきさわる絵本は、隆起印刷によって、絵もさわって読む工夫にある。目の見えない人のためだけではなく、見える人も一緒に読んで見えないことの理解につながっている。

点字・点訳絵本の趣意は、読む楽しみの共有にある。作者や点訳者や触図デザイナーたちの絵本づくりの想いが込められている。本学が所蔵する点字つき絵本をあらためて開いて、「りんごの棚」の活動について考えた。



講師：攪上久子先生

講座2は、「バリアフリー絵本の願いー世界の知恵と工夫からー」（講師 攪上久子氏、1月11日、聖学院大学総合図書館4階）である。

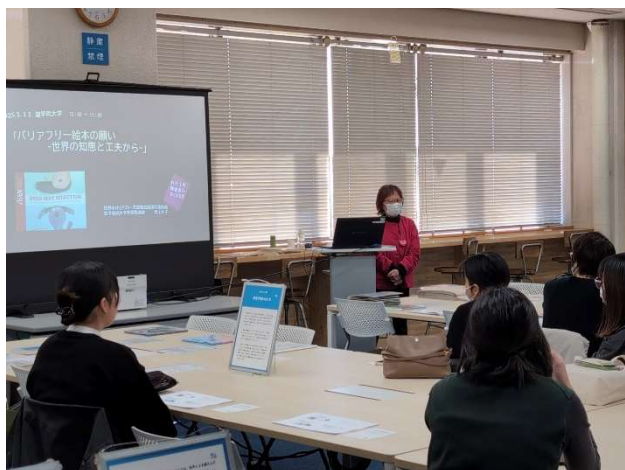
子どもの本はボーダーを超える。IBBYの理念は北欧のノーマライゼーションの理念と結びつく。図書展の本意は本に会する社会参加にある。優劣よりも新しいアプローチや視点に、選定の理由があるという。初参加の国や地域の作品にもふれる機会になり、発想やアイデアも膨らむ。本の普及や研究の発展は、世界中の人々の交流を開いて、本にかかわる人たちへの励ましになる。

読むことは文字を目で見ることにある。行間や余白、活字の大きさやUDフォント、絵図や文字の色調や配色、紙面やスライドの背景色、読みきることができる文量など、視覚的なわかりやすさやアクセシビリティのあり方を考える必要がある。

実際には、読むことは目で見て情報を得るだけではない。耳で・手で感じて味わうことでもある。さわる絵本には、視覚的イメージを必要としない表現もある。見えないものをさわり心地で読んで、見過ごしてきたことに気付く。

LL ブックと子どもの本とのちがいも知った。「やさしく」は簡便化ではない。読む人の生活年齢とニーズに合う内容の本は、読むことをそばで手伝っている。

障害が極端に変形されて一義的に固定化されたステレオタイプで描かれていないか。障害に立ち向かう姿をことさら強調していないか。そして、稀有な努力が奇跡をもたらすような物語にしていないか。読むことは、善意が健常者優先主義（ableism）に傾くことをゆるがして、しばし立ち止まってみることもあるだろう。



会場の様子

本のなかで人間同士として今ここに出あう。両講座の後も共に本を開いて語り合う参加者の姿が印象深かった。バリアフリー絵本研究をこれからも続けたいと思う。ご参加を歓迎いたします。

報告者：寺崎 恵子 [てらさき・けいこ]
聖学院大学人文学部准教授

報 告

聖学院大学総合研究所 牧会心理研究主催

2024 年度 牧会ウインターセミナー
「牧師・教職者にとってのグリーフケア」

開催日：2025年2月3日（月）10：30～16：00

会場：1号館 1Café

講師：岩上真歩子（日本ホーリネス教団久喜キリスト教会主任牧師・心のケアミニストリー「タリタ・クム」代表）

参加人数：19名



講師：岩上 真歩子先生

心地よいざわめきというものがある。たくさんの人が集い、相互に関わっているときに、影響関係を見せるのである。そしてその関係の中で些細な変化や予期せぬ変化を経験する。臨床や牧会の現場では、このようなざわめきをしばしば感じる。

ひとが変化する場合なのだろう。

そして、今回のセミナー会場でもこの心地よいざわめきを感じることができた。

2024年度の牧会ウインターセミナーは、『キリストの愛に基づくグリーフケア——エマオの途上を主イエスと歩む』を著し、牧師として、また臨床心理士・公認心理師として、教会や学校の現場でグリーフケアに精力的に取り組まれている岩上真歩子先生を講師に迎えて開催された。

グループの分かち合いの時間は、皆が積極的にご自身の現状を吐露し合い、互いに労いと励ましの場の時をつくられていたように見え、何よりも講師の岩上先生が相

互作用性の中で自在に変化し関わっておられた。

さてそんな中で語られる話は、単に一般的なグリーフケアについての解説ということではない。岩上先生は、神と人との根本的な喪失体験から取り上げ、深い世界に私たちを導いてくれる。また、ルツ記をグリーフケアの視点から読み解かれ、ナオミが自分のアイデンティティをどのように周りに語っていったかにも焦点を当てられた。

終盤は、応答者が登壇し、本学総合研究所特別研究員の花野井が、グリーフケアの日本での先駆者であった故平山正実（元本学大学院教授）の働きを語った。そして、死別だけでなくキリスト者特有の信仰生活上の喪失体験にも触れ、信仰者が「祝福と呪い」「幸福と不幸」などの相反するものを感じやすく、さらにそのどちらかに自分の身を切り離して置きがちであることを問題視し、平山の「呪いは、既に祝福の中に包括され位置付けられている」という言葉を借り、魂の導き手となる牧者の存在の必要を信徒と心理士の立場から話された。

その後、参加者から講師への質疑応答も行われ、盛会の内に終わることができた。

報告者：藤掛明 [ふじかけ・あきら]

聖学院大学総合研究所客員教授

牧会心理研究代表

報 告

聖学院大学総合研究所 心理福祉学研究主催

2024 年度 心理福祉学研究会 共生社会の実現に向けて 心理福祉学からのアプローチ

開 催 日：2025 年 2 月 15 日（土）

シンポジウム会場：教授会室 10：00～12：20 交流会会場：エルピスホール 12：30～13：30

コーディネーター：田村綾子（聖学院大学副学長、心理福祉学研究代表、同大学心理福祉学部長、教授）

シンポジスト：森岡由起子（聖学院大学心理福祉学部客員教授、心理相談室長）

谷口恵子（聖学院大学心理福祉学部准教授）

木村太郎（聖学院大学心理福祉学部特任助手）

参 加 人 数：56 名



森岡由起子客員教授

田村綾子教授

2025 年 2 月 15 日（土）に「共生社会の実現に向けて 心理福祉学からのアプローチ：子ども・若者の生きづらさへの支援——家庭・学校・地域から」と題した研究会が教授会室を会場として開催された。教職員、学生、卒業生、地域の方も含めた 56 名の参加者があり非常に盛会であった。

10:00～12:20 のシンポジウムは、田村綾子教授の司会により、①「地域に開かれた心理相談室から：子ども・青年と家族への支援」森岡由起子客員教授、②「スクールソーシャルワーク：子どもの権利に基づくかわり」谷口恵子准教授、③「キリスト教主義学校の学生支援：キリスト教の人間理解から」木村太郎特任助手の 3 人の登壇者によるシンポジウム形式で実施された。

森岡氏の発表では、不登校、いじめ認知件数、子どもの自殺数や児童青年期のメンタルヘルスにかかわる

様々な統計が紹介されたあと、児童青年精神科医療の現場からみた、小学生・中学生・高校生と家族、特に思春期・青年期の病理と家族に対する支援に関する留意点の解説がなされた。また、これらの知見を生かして本学部の地域貢献の一端を担っている聖学院大学心理福祉学部附属心理相談室の紹介もなされ、利用者は増加しているが、関係機関との相互連携が課題であることが報告された。

谷口氏からは、本学部における、スクールソーシャルワーカー養成課程の担当者としての専門的な視点から、子どもを取り巻く困難さの現実、スクールソーシャルワーク、子どもの権利を守るためにという柱で、虐待相談、子どもの相対的貧困率、不登校児童数などの現況を理解する統計資料の解説のあとに、子どもとのかかわりの実際として、「まずは子どもの声を聴く、それを尊重する」「環境を整え、一人ひとりを尊重する」ことの重要性が説かれた。



谷口恵子准教授



木村太郎特任助手

木村氏は、大学チャプレンとして、キリスト教の神理解、キリスト教の人間理解、生きづらさとその克服：他者の言葉、キリスト教主義学校の学生支援の柱で、三位一体論から人間理解へ、神の被造物として、共同体の中の生、主観を相対化する他社の言葉などについて考察が展開された。それらが本学でのキャンパスライフにおいて学生の「共同体的生の再認識」につながっていることが示唆され、「礼拝によって、自らが愛されている個であることを知り、また、キャンパスという共同体を通して、より良く生きていくことができる存在であると知る」ことが語られた。本学の学生エンカレッジセンター窓口「フィリア」もその共同体の構成に寄与している場所として紹介された。

三者の発表の後、発表内容に関連して相互に意見交換がなされ、子どもにかかわる援助職の実際や子どもの自己肯定感に関する議論がなされた。参加者からの質問の時間には、現役のスクールソーシャルワーカーからご発言があり、職務を取り巻く環境の現状の紹介や子どもが利用できる社会的資源についての質問があり、登壇者と活発な意見交換がなされた。

また、12:30～13:30 の交流会（エルピスホール）では、軽食をとりながらシンポジウムの参加者で交流の時をもつことができた。研究会としては今後も地域貢献を兼ねて定期的な公開シンポジウムに取り組んでいきたい。

【Data】

〔共催〕 聖学院大学大学院心理福祉学研究科
聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科
聖学院大学心理福祉学部附属心理相談室

報告者：中谷茂一〔なかに・しげかず〕
聖学院大学心理福祉学部教授



シンポジウム会場の様子



交流会会場の様子

報 告

聖学院大学総合研究所 聖学院大学心理福祉学部附属心理相談室主催

2024 年度 心理学研究講演会
愛着発達上の課題のある子どもたちはなぜ支援が難しいのか？
メンタライゼーション理論から紐解く

共 催：心理福祉学研究 心理学研究分科会、聖学院大学大学院 心理福祉学研究科
開 催 日：2025 年 3 月 3 日（月）15：00～17：00
会 場：オンライン開催（Zoom）
講 師：大橋良枝（京都文教大学臨床心理学部教授）
参加人数：171 名

2025 年 3 月 3 日「愛着発達上の課題のある子ども達は、なぜ支援が難しいのか？——メンタライゼーション理論から紐解く」というテーマで、一昨年まで聖学院大学心理福祉学部で教授をされており、精神分析学と集団精神療法がご専門の大橋良枝先生の講演会が開催された。月曜日という平日であったにもかかわらず、参加申込者は 195 名、実際の参加者は 171 名と、全国から心理関係者だけでなく、児童精神科医、施設職員、精神科看護師、教師など多くの職種の方が参加し、参加者の 97%が「よかった」と評価し、81 名の方からは具体的なコメントが寄せられた（このような講演会では、珍しいこと）。

トラウマ体験や生育上の歪みがあることから生起する問題（「愛着障害」など）を「〇〇だから・・・」と固定的に捉えるのではなく、自分あるいは当事者との「関係性の問題」として理解しようとする視点（力動的理解）を持つことで新たな展開が可能となることを、先生ご自身の体験や特別支援学校教師へのスーパーバイズ経験の実際例をもとに話された。

メンタライジングは「自己と他者の行動を理解する創造的活動」と説明され、「夢想すること（あれこれ考える心の活動）」が日常生活でも大事だと説かれた。夢想（reverie）とは Bion の概念で、母親が赤ちゃんの情緒を共感的に受け止め消化して返す心の状態をさしているが、大人になった我々にも必要な力といえる。またこの夢想は、我々自身が安心な状況にいないとできないという指摘もされていた。さらに、集団において起こりがちなスケープゴートを防ぐ工夫や、改めて「共感」とは何だろうと

考えさせられる講演でもあった。

講演後多くの質問やコメントがあり、「戦争体験を持つ 90 歳の祖父にその話を聞いてみたいが、傷つけることになるのではないかと迷っている」という質問があった。それに対して大橋先生と森岡がコメントさせていただいたが、その後で「この会自体が集団療法のような場になっていること、さらに先生の姿勢のあり方を学ぶ機会となった。臨床家は傾聴と共感しなければ・・・と不和の姿勢を忘れ、相手の感情の責任まで自分のものと勘違いしてしまうことがあるように思った。先生の誠実さとか純粋性、クライアントの前で自然な自分の感情を開かれた姿勢で味わえることも、大きく『関係性』に作用しているのではと感じた。」というコメントが、参加者の感想を代表していると思われる。

参加者のアンケートでは、愛着や「関係性を通じた支援」をテーマとした講演の希望が多く、次回の講演会のテーマを検討中である。



コーディネーター・司会：
森岡由起子客員教授

講演者：大橋良枝教授

報告者：森岡由起子 [もりおか・ゆきこ]
聖学院大学心理福祉学部附属心理相談室室長
同学部客員教授

聖学院大学総合研究所 児童学研究会主催

報 告

2024 年度 第 2 回〈児童〉における「総合人間学の試み」研究会 小学校教員養成から教員研修へとつなげる小学校英語指導者育成プログラムの開発と検

開 催 日 : 2025 年 3 月 19 日 (水) 13 : 00~14 : 30

会 場 : 4403 教室

講 師 : 小川隆夫 (聖学院大学人文学部特任教授)

参加人数 : 13 名

2025 年 3 月 19 日 (水)、4403 教室において、人文学部子ども教育学科特任教授・小川隆夫氏が、本学における小学校教員養成の実践に基づいた小学校英語指導者育成プログラムの開発と検証について研究発表を行った。以下にその概要を報告する。



発表者 : 小川隆夫特任教授

小学校英語指導者に必要な英語力と授業力

2017 年に発表された「小学校教員養成課程外国語 (英語) コア・カリキュラム」では、小学校英語指導者に外国語活動・外国語の授業ができる国際的な基準である CEFR B1 レベルの英語力を身に付けること、また指導技術としては英語での語りかけ方、児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方、文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方を習得することが求められている。

授業力テストの開発

本学子ども教育学科の「外国語」「外国語指導法」ではコア・カリキュラムに沿ったシラバスで授業を行っているが、学生それぞれの授業力を評価することは難しく何をどのよ

うに指導すれば卒業後自律した指導者として自信を持って授業ができるようになるかを模索していた。そこで本研究では数値により学生それぞれの授業力を評価するとともに授業の改善に結び付く授業力テストを開発したいと考えた。

開発にあたっては Cambridge English Qualifications 及び Hammond's (1973) Product Oriented Program Evaluation (成果中心のプログラム評価) を参考に、指導技術を一般的な授業で行われる以下の 4 つの活動にして授業力を評価するためのルーブリック評価表を作成した。

- (1) 英語での語りかけ方⇒あいさつ (自己紹介)
- (2) 児童の発話の引き出し方⇒言語材料の導入
- (3) 児童とのやり取りの進め方⇒活動の紹介
- (4) 英語での語りかけ方⇒英語絵本の読み聞かせ

本テストはタブレットから自動的に指示の音声の流れ 10 分間で完結する仕組みである。学生は指示に沿って児童役学生を相手に 4 つの活動の授業を行い、他のタブレットでその様子を撮影した。動画は 3 名の教員によってルーブリック評価表に基づいて評価され、それぞれにフィードバックが行われた。

ルーブリック評価表は横に 5 項目 (語彙・文法、流暢さ、発音・イントネーション、双方向性、非言語コミュニケーション)、縦に 5 から 1 のパフォーマンスバンド (5 が最高得点) が書かれている。

授業力テストの結果と授業改善

授業力テストは 2022 年 3 年生 38 名、2023 年 3 年生 32 名、2024 年 3 年生 10 名に対して実施し、以下のような結果になった。

(1) 自己紹介					
	語彙・文法	流暢さ	発音・イント	双方向性	非言語コミ
2022	2.90	3.45	3.18	2.05	2.64
2023	4.0	3.90	3.93	3.10	3.40
2024	4.0	3.85	4.42	4.3	4.42

(2) 言語材料の導入					
	語彙・文法	流暢さ	発音・イント	双方向性	非言語コミ
2022	3.13	3.33	3.48	3.70	3.55
2023	3.67	3.60	3.87	4.13	3.70
2024	3.36	3.87	4.0	4.12	4.13

(3) 活動の紹介					
	語彙・文法	流暢さ	発音・イント	双方向性	非言語コミ
2022	2.42	2.42	2.97	2.45	2.73
2023	3.27	3.33	3.80	3.30	3.50
2024	3.36	3.5	3.75	4.0	3.75

(4) 読み聞かせ					
	語彙・文法	流暢さ	発音・イント	双方向性	非言語コミ
2022	2.33	2.27	2.61	1.82	2.33
2023	3.90	3.77	3.57	2.67	3.23
2024	4.2	3.9	4.0	3.8	4.0

4つの活動とも3年間で数値は毎回上昇しているが、これは前年度の授業力テストの結果を基に授業改善を続けた成果と考える。特に双方向性を重視し常に児童とコミュニケーションを取りながら活動を行うように働きかけたが、以下のことはルーティンとして実施した。

- (1) 短時間マイクロティーチングを毎時間実施する。
- (2) 定型表現と教室英語を練習した後、音声データを提出しフィードバックを受けて再度練習する。
- (3) 同一絵本を全員に一か月貸し出し、各自が練習する。
- ① 音声データを聴き発音とリズム・イントネーションなどを真似する。
- ② 先輩の音読ビデオを観る。
- ③ ページを指定して頻繁に音読を発表する。

これらの練習により、学生たちにオールイングリッシュの授

業が習慣化され英語を話すことに抵抗が少なくなったように思われる。

授業力テストの成果と課題

成果

- ・授業力テストにより学生の指導技術の未熟な点がよく分かり一人ずつの授業力向上のためのアドバイスが可能になった。また、「外国語」「外国語指導法」の授業改善に繋がった。
- ・授業内で活用できる定型表現と教室英語がある程度定着した。
- ・読み聞かせのテクニックが定着した。

課題

- ・「外国語」「外国語指導法」の30時間で学生の授業力をどこまで高めることができるか。
- ・テストではなく45分の授業内での授業力はどのように評価するか。

着任前研修と卒業生の授業分析

外国語指導法の総仕上げとして4月から教壇に立つ4年生を対象にした着任前外国語研修を秋学期最終日に毎年実施している。内容は主にALT（外国人英語指導助手）とのTT授業の進め方である。自由参加であるがALTとのTT（Team Teaching）の意義を話し合い、相手に興味を持ち、相手を認め、互いの資質を生かすことが重要であることを学んだ。また、本学の米国人教員とともにTTの模擬授業を行いながら、それぞれの役割を確認するとともに教室での立ち位置 In と Out を効果的に行うことを体験した。

卒業生の授業分析では教師生活2年目の6年生の外国語授業を分析した。在学中のデータと比較し効果的に児童の発話を引き出すことができるようになり、適切な言い直しや言い換えができるようになっていたことを確認できた。

その他、韓国、台湾、タイの大学における英語指導者養成のための授業と現地小学校の様子を紹介し、発表を終えた。

質疑応答

授業力テストの動画が紹介され、学生が教室英語を使っている姿を参加者全員で観て感想を述べ合った。

子どもの英語の発話に対して指導者が自然にコメントすることができれば、さらに子どもの反応を引き出せるという点について、それは他の教科でも同様であるという声が上がった。自然なやり取りをすることで学習効果は上がり、英語の場合、定型表現が大切であることが確認された。

言語学習のためのアプリも増え、学習方法は多様化している。文科省が現在、アバターの開発に取り組んでいるとのことだが、人間以外とのやり取りでも学習効果上がるのだろうかという懸念の声もあった。

報告者：松本祐子 [まつもと・ゆうこ]
聖学院大学人文学部子ども教育学科教授



会場の様子

第1回〈児童〉における「総合人間学の試み」研究会は、2024年7月17日に4403教室にて、柴崎裕聖学院大学人文学部子ども教育学科特任教授により「東日本大震災復興支援〈2011きぼうのてプロジェクト〉2011～2014年実践からプロジェクト学習を考える——〈2024きぼうのて能登プロジェクト〉に備えて」をテーマに開催され、13名が参加した。

同研究発表の内容は、『聖学院大学総合研究所紀要』（Vol.72 2026.3）に掲載の予定。



発表者：柴崎裕特任教授



会場の様子



報告の様子

年次報告

2024 年度 聖学院大学総合研究所年次報告

事業報告

1. 研究活動実績

2024 年度は、法人全体の目標である「安定した財政基盤の構築」にむけ、総合研究所としてもあらためて活動および予算の見直しを行った。HP の移行、NL 発行方法の見直し、紀要制作方法の変更などを行い、2024 年度の予算執行を抑えるとともに、2025 年度の予算申請では大幅な削減を実現した。

2024 年度は、10 件の研究会・研修会、6 件の研究講演会・セミナーを開催した。

基礎自治体マネジメント研究は第 4 期を迎えた。G フェローも含めた研究会活動も活発化しており、釜石市訪問など定例会以外の活動も展開された。

グローバリゼーション研究と日本文化研究会では、5 月に今井勇准教授による「戦後日本の『戦没者』とキリスト者遺族の会——戦没者遺族運動における加害責任の自覚」と題した研究発表が行われた。

心理福祉学研究会では、福祉のこころ・ソーシャルワーク研究分科会が 2023 年 12 月に逝去された総合研究所名誉教授で人間福祉スーパービジョンセンター顧問であった柏木昭先生を偲び、「柏木昭先生の教えを紡ぐ」と題した研究講演会を開催した。心理学研究分科会は、大橋良枝京都文教大学臨床心理学部教授を講師に「愛着発達上の課題のある子どもたちはなぜ支援が難しいのか？メンタライゼーション理論から紐解く」と題した講演会をオンライン開催した。また、昨年度に引き続き、2 月には FD を兼ねた研究会を、「こども・若者の生きづらさへの支援——家庭・学校・地域から」をテーマにシンポジウムとして開催し、実習先や地域の方などに広く公開した。

牧会心理研究は、2 月にセミナーを開催。本セミナーは長年継続されてきたが、諸般の都合により今回が最後となる。2025 年度からは定例の分科会のみで開催となる予定である。

児童学研究では、柴崎裕特任教授による「東日本大震災復興支援『2011 きぼうのてプロジェクト』2011～2014 年実践からプロジェクト学習を考える～『2024 きぼうのて能登プロジェクト』に備えて～」と題した研究発表が行われた。

総合研究所を起点とした大学全体の研究の活性化と研究者支援、研究を基盤とした競争力の強化を目指す研究助成制度は残念ながら新規の申し込みがなく、2024 年度採択の 2 件、今井勇ほか「戦後日本の革新勢力における反戦・平和思想の変容研究——『護憲』と『反権力』をめぐる日本社会党の可能性と限界」（2023-1）、岡村佳代ほか「多文化コンピテンシー尺度の開発と日韓大学生の多文化コンピテンシー」（2023-2）が活動を行った。

紀要編集委員会では、今年度も院生からの投稿があり、審査等を実施した。また、紀要制作について見直しを行い予算削減に努めた。NL も 2025 年度からは電子配信のみとすることが確認された。

研究推進委員会では、競争的資金獲得に関する研修会の開催、研究支援制度の検討、研究データ管理ポリシーの確認・提言などが行われた。

また、2025 年 4 月に向けて総合研究所 HP の見直しが行われた。総合研究所では、これまで独自のドメインを保有し管理運営をしてきたが、セキュリティならびに費用削減などの観点から大学 HP 内にページを設けることとなった。これにより、総合研究所独自のドメインの利用は 2025 年 4 月末までとなった。

2. 補助活動事業 人間福祉スーパービジョンセンター

2024 年度の委員会は 2 回（ハイブリット）、開催された。

グループ・個別・ピア・スーパーバイザー支援などのスーパービジョン（以下、SV）事業では、グループ SV の開催は見送り、ピア・スーパービジョンも実施体制が整わず、開催には至らなかった。一方、個別 SV はオンラインを中心に実施され、新規に 4 名の申込みもあり、計 7 名（延べ 35 回）を実施するなど好調であった。スーパーバイザー支援制度も 2 件（3 名）が実施された。

人間福祉スーパービジョンセンター編、柏木昭、相川章子、牛津信忠著『対等な“かかわり”そして“ピアサポート”へ』（人間福祉スーパービジョン研究 3）が同シリーズの最終巻として、聖学院大学出版会より刊行された。

長く、当センターのセンター長を務められた相川章子教授が 2024 年度をもって退職されることとなり、2025 年度の体制について検討がなされた。

3. 補助活動事業 聖学院キッズ・イングリッシュ

2024 年度は、ほぼ予定通り授業を実施した。全体的に受講者の出入りが多かった。受講者数は延べ 99 名（最終は 91 名）であった。

実施体制としては、教員および授業対応を駒込にて、募集、申込情報管理、出欠席のとりまとめ、スケジュール変更等の参加者へのお知らせ、退会手続き、会計管理などを大学事務（研究支援課）が担当している。昨年度より進めた Teams による情報共有などが定着してきている。

4. 補助活動事業 聖学院大学出版会

2024 年度は次の 3 点を刊行した。また 2025 年度企画としては 2 件の応募があり、審査を実施した。

・宮本沙代著

『若松賤子の生涯とその文芸：女性、子どもへの愛に生きて』

・人間福祉スーパービジョンセンター編、柏木昭、相川章子、牛津信忠著

『対等な“かかわり”そして“ピアサポート”へ』（人間福祉スーパービジョン研究 3）

・聖学院大学サステナビリティセンター監修、鈴木詩衣菜編

『SDGs で世界を探求する——9 つのテーマから学ぶ』

また、2 号館裏倉庫の曝書および大掃除を行った。これにより、書籍の在庫数に修正が発生した。

2024 年度 聖学院大学総合研究所 研究体制

研究組織（センターと研究）

1. 文化総合研究センター

センター長：小池茂子

- (1) 韓国長老会神学大学校との学術交流による研究（「日韓神学者学術会議」）

※学校間協定による全学対応案件

研究代表：小池茂子

代表補佐：菊地順、洛雲海、村瀬天出夫

- (2) 神学学術研究「組織神学・伝道研究」

研究代表：菊地順

- (3) 日本文化学研究「グローバリゼーションと日本文化研究」

研究代表：杉淵洋一

代表補佐：木下綾子

- (4) ラインホルド・ニーバー研究

研究代表：菊地順（代行）

- (5) 税法研究「埼玉税法研究」

研究代表〔会長〕：野田扇三郎

代表補佐：木村裕二

- (6) 基礎自治体マネジメント研究

研究代表：猪狩廣美

代表補佐：長嶋佐央里

- (7) 子どものこころと絵本研究

研究代表：寺崎恵子

【助成研究】

- ・「戦後日本の革新勢力における反戦・平和思想の変容研究——「護憲」と「反権力」をめぐる日本社会党の可能性と限界」（2023-1）

研究代表：今井勇

共同研究者：相川陽一、森脇孝広

【プロジェクト研究】

- ・「韓国の移民政策と排外主義」（2022-2）

研究代表：春木育美

- ・「「元」の探求——復興を思想的に支える正義論の構想」（2021-1）

研究代表：今出敏彦

2. 心理福祉総合研究センター

センター長：田村綾子

- (1) 心理福祉学研究

研究代表：田村綾子

代表補佐：中谷茂一

分科会 1「福祉のこころ・ソーシャルワーク研究」

分科会代表：相川章子

分科会 2「心理学研究」

分科会代表：森岡由起子

- (2) 牧会心理学研究

研究代表：藤掛明

【プロジェクト研究】

- ・「攻撃的乳幼児の増加する東日本大震災被災地における保育士向け心理教育プログラム開発」（2020-2）

研究代表：大橋良枝

- ・「精神保健福祉士によるソーシャルアクション研修プログラム開発と普及啓発に関する研究」(2021-2)

研究代表：小沼聖治

3. 教育総合研究センター

センター長：西村洋一

- (1) 児童学研究「〈児童〉における「総合人間学」の試み研究」

研究代表：田澤薫

代表補佐：松本祐子

【助成研究】

- ・「多文化コンピテンシー尺度の開発と日韓大学生の多文化コンピテンシー」(2023-2)

研究代表：岡村佳代

共同研究者：朴エスター、クォン・スング、
クォン・ミギョン

【プロジェクト研究】

- ・「情報圏を構成するパーソナルデジタルドキュメントの長期利用保証に関する研究」(2020-1)

研究代表：塩崎亮

- ・「大学ボランティアセンターの教育機能の発揮条件に関する実証的研究

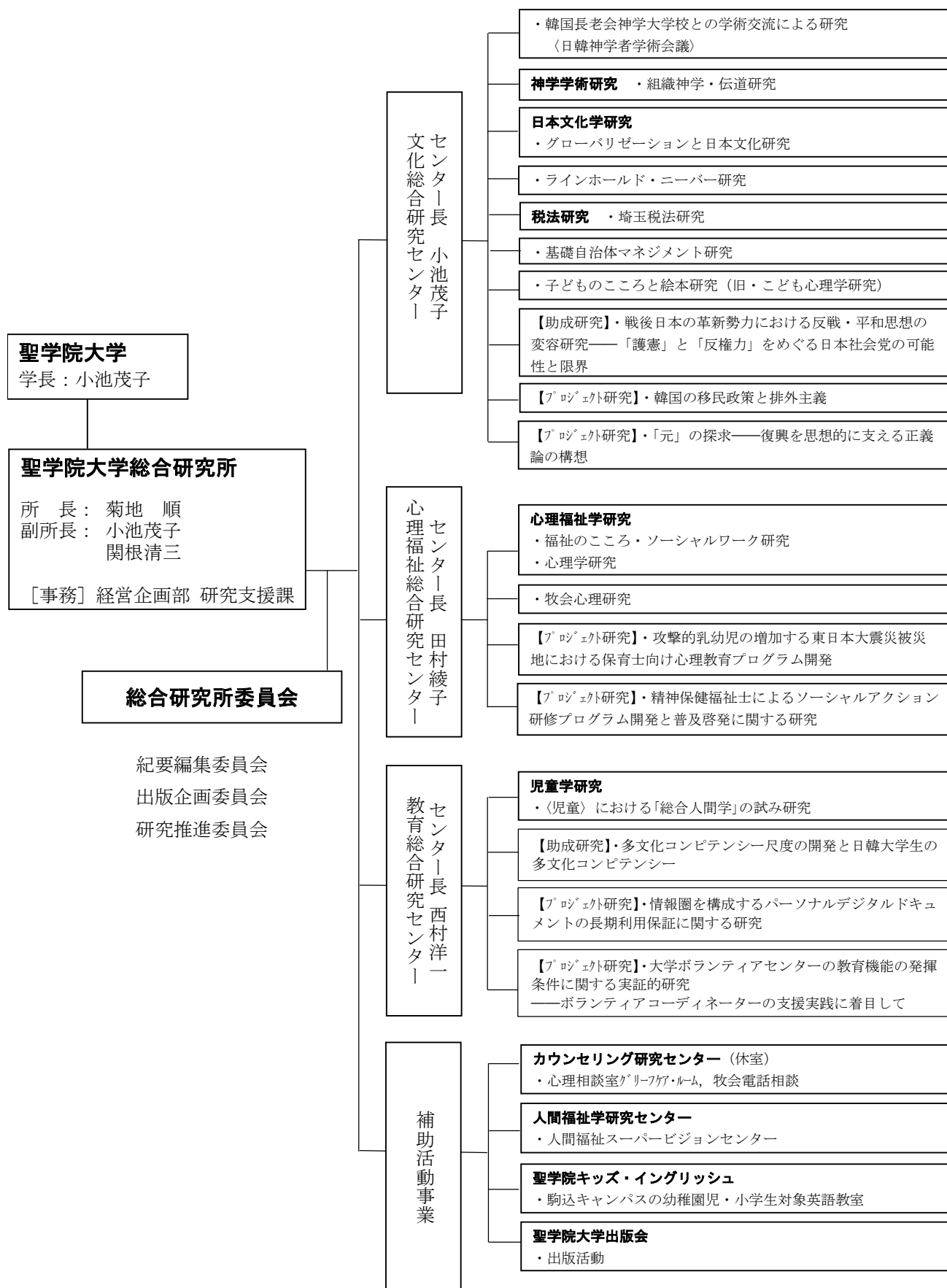
——ボランティアコーディネーターの支援実践に着目して」(2022-1)

研究代表：若原幸範

共同研究者：川田虎男、芦澤弘子

2024 年度第 2 回（2024 年 5 月）総合研究所委員会承認

聖学院大学総合研究所 研究組織図



2024 年 5 月 現在

2024 年度 聖学院大学総合研究所 活動 (2024/4/1～2025/3/31)

研究会・研修会

開催日	開催名称	主 題
5 月 18 日	第 18 回埼玉税法研究会	第一部：基調講演 税理士としてどう生きるか！ 第二部：修士論文構想報告会
5 月 22 日	グローバル化と日本文化研究会	戦後日本の「戦没者」とキリスト者遺族の会 ——戦没者遺族運動における加害責任の自覚
7 月 10 日	競争的資金獲得のための研修会	①趣旨説明 ②科研費受給の体験 ③質疑応答 ④研究支援について
7 月 17 日	第 1 回児童学研究会	東日本大震災復興支援「2011 きぼうのてプロジェクト」 2011～2014 年実践からプロジェクト学習を考える—— 「2024 きぼうのて能登プロジェクト」に備えて
11 月 9 日	第 19 回埼玉税法研究会	修士論文構想報告会
2 月 12 日	「公正な研究活動の推進におけるコンプライアンス教育」研修会	オープンアクセス政策と研究データ管理
3 月 19 日	第 2 回児童学研究会	小学校教員養成から教員研修へとつなげる小学校英語指導者育成プログラムの開発と検証
定例開催 (全 3 回)	牧会心理研究会（第一研究会）	<非公開>
定例開催 (全 3 回)	牧会心理研究会（第二研究会）	<非公開>
定例開催 (全 10 回)	基礎自治体マネジメント研究会 若手・中核人材育成プログラム	講義・分野別ゼミ
定例開催 (全 12 回)	研究会・G フェロー	「今国会に提出されている地方自治法改正案とその影響について」ほか

研究講演会・シンポジウム・セミナー

開催日	開催名称	講演題
10 月 12 日	心理福祉学研究 福祉のこころ・ソーシャルワーク研究会「柏木昭先生の教えを紡ぐ」	第一部 ①先生方が語る「柏木昭先生の教えと私」 ②卒業生が語る「柏木昭先生の教えと私」 第二部 柏木昭先生を偲ぶ会（懇親会）
12 月 14 日	第 1 回子どものこころと絵本研究 講座 1	6 つの点に込められた思い——点字・点訳絵本の可能性
1 月 11 日	第 2 回子どものこころと絵本研究 講座 2	バリアフリー絵本の願い——世界の知恵と工夫から
2 月 3 日	牧会ウインターセミナー	牧師・教職者にとってのグリーフケア
2 月 15 日	心理福祉学研究会	子ども・若者の生きづらさへの支援——家庭・学校・地域から
3 月 3 日	心理学研究講演会	愛着発達上の課題のあるこどもたちはなぜ支援が難しいのか？——メンタライゼーション理論から紐解く

著編者	書名（シリーズ名）	版	本体価格	刊行年月日
聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター（編） 柏木昭、相川章子、牛津信忠（著）	対等な“かかわり”そして“ピアサポート”へ （人間福祉スーパービジョン研究 3）	初版	2,200 円	2025 年 4 月 10 日 ISBN978-4-909891-19-8

人間福祉スーパービジョンセンター

支援内容	実施回数	参加人数（のべ）
個別スーパービジョン	計 33 回	7
スーパーバイザー研究支援（SVR）	計 2 回	3

聖学院キッズイングリッシュ

クラス	実施回数	参加人数（のべ）
幼稚園クラス	年中 24 回	13
	年長 24 回	16
小学生クラス	1 年 26 回	21
	2～6 年 28 回	49

助成研究

研究課題名	研究者	概要
戦後日本の革新勢力における反戦・平和思想の変容研究 ——「護憲」と「反権力」をめぐる日本社会党の可能性と限界	研究代表：今井勇（聖学院大学人文学部日本文化学科准教授） 共同研究：相川陽一（長野大学環境ツーリズム学部環境ツーリズム学科教授）、森脇孝広（都留文科大学非常勤講師）	2023 年度の調査・分析成果に基づいた投稿論文を執筆し、『歴史評論』893号に掲載された。また、千葉県芝山町立芝山古墳・はにわ博物館所蔵の三里塚闘争関係資料（石井英祐資料）の調査・分析作業を進めた。
多文化コンピテンシー尺度の開発と日韓大学生の多文化コンピテンシー	研究代表：岡村佳代（聖学院大学基礎総合教育部教授） 共同研究：朴エスター（東国大学移住多文化統合研究所研究招聘教授）、クォン・スング（同移住多文化統合研究所教授）、クォン・ミギョン（同移住多文化統合研究所教授）	年度末に、開発した多文化コンピテンシー尺度を用いて日韓各 500 名の大学生を対象に Web 調査を実施したが、2024 年度は共同研究者と協議しながらそのデータの分析、結果の考察等を行い、論文執筆を行った。

※登壇者の役職名・所属は、実施当時のものを記載しています。

委員会

委員会名	議題	開催回数
総合研究所委員会	研究所組織・研究体制 研究助成募集・選定 他	全 7 回
紀要編集委員会	紀要 71 号・NL Vol.34 掲載内容 2025 年活動予定 他	全 5 回
研究推進委員会	剽窃チェックツールの運用 研究支援制度見直し 他	全 3 回
出版企画委員会	2025 度出版企画選定 他	全 3 回
人間福祉スーパービジョンセンター委員会	ピア・スーパービジョンの開催について、2025 年度活動計画 他	全 2 回

刊行物（年間）

刊行物名	巻号	発行日
聖学院大学総合研究所紀要	71 号	2025 年 3 月 31 日
聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER 含・聖学院大学総合研究所活動報告（2021～2023 年度）	Vol.34	2024 年 9 月 1 日
基礎自治体 若手・中核人材育成プログラム 報告書	2023 年度	2024 年 7 月

聖学院大学出版会

著編者	書名（シリーズ名）	版	本体価格	刊行年月日
宮本沙代（著）	若松賤子の生涯とその文芸 ——女性、子どもへの愛に生きて	初版	4,000 円	2025 年 1 月 21 日 ISBN978-4-909891-17-4
聖学院大学サステナビリティセンター（監修） 鈴木詩衣菜（編）	SDGs で世界を探求する ——9 つのテーマから学ぶ	初版	2,400 円	2025 年 4 月 10 日 ISBN978-4-909891-18-1

アンケート

2024 年度心理学研究講演会
『愛着発達上の課題のある子どもたちはなぜ支援が難しいのか？
メンタライゼーション理論から紐解く』

開催日：2025 年 3 月 3 日（月）15：00～17：00

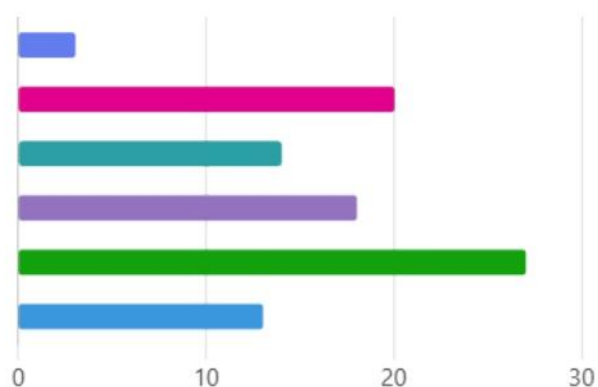
会場：オンライン開催（ZOOM）

講演者：大橋良枝（京都文教大学 臨床心理学部教授）

参加人数：171 名 回答者：95 名（回答率：56.8%）

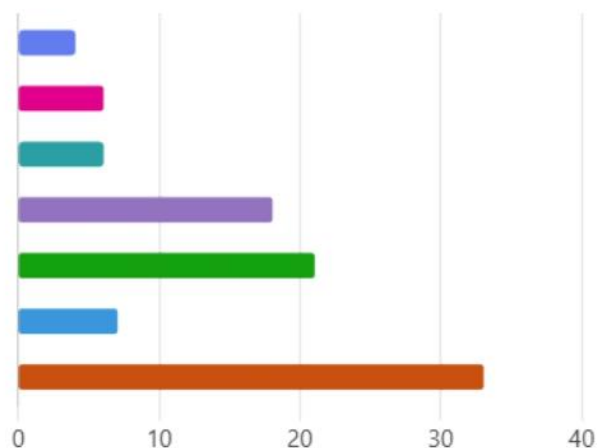
1. 年齢

10代	3
20代	20
30代	14
40代	18
50代	27
60代以上	13

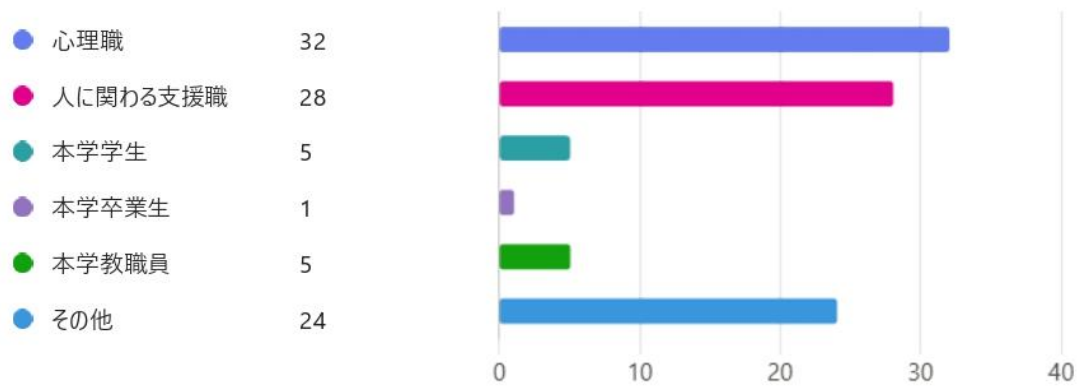


2. 参加の動機

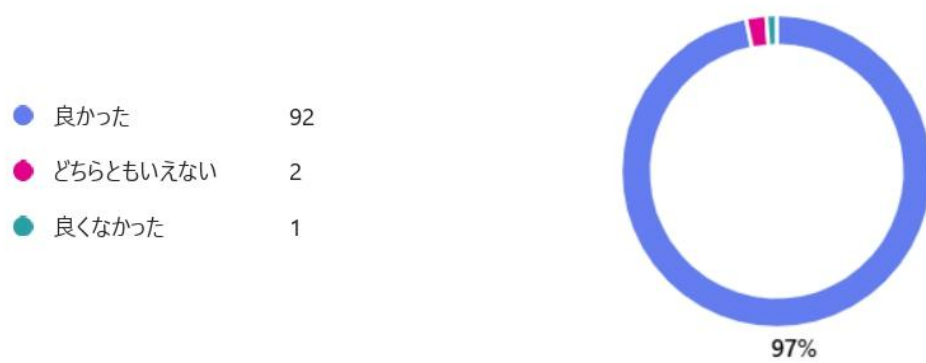
大学HPを見て	4
総合研究所HPを見て	6
こくちーずを見て	6
チラシを受け取って	18
所属団体からの案内	21
教員からの誘い	7
その他	33



3. 職業



4. 講演の感想

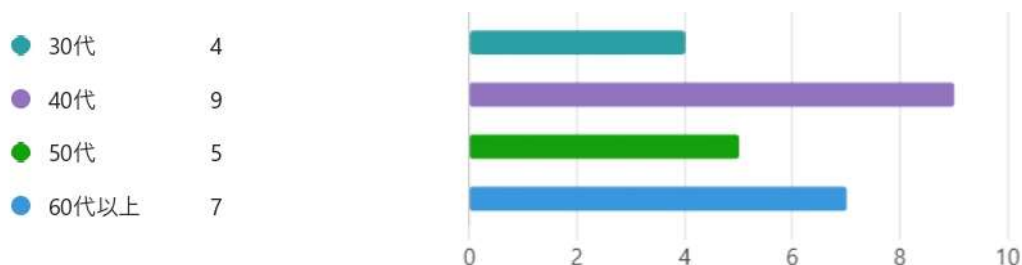


アンケート

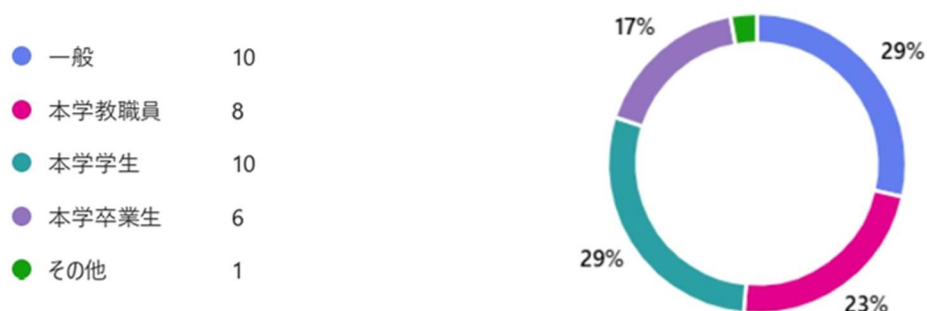
2024 年度心理福祉学研究会
「共生社会の実現に向けて——心理福祉学からのアプローチ」
シンポジウム「子ども・若者の生きづらさへの支援——家庭、学校、地域から」

開催日：2025年2月15日（土）10：00～12：20 交流会 12：30～13：30
会場：聖学院大学 教授会室（シンポジウム）、エルピスホール（交流会）
シンポジスト：森岡由起子（聖学院大学心理学部客員教授・心理相談室長）
谷口恵子（聖学院大学心理福祉学部准教授）
木村太郎（聖学院大学心理福祉学部特任助手・同学部チャブレン）
コーディネーター：田村綾子（心理福祉学研究会代表・聖学院大学副学長・心理福祉学部長・教授）
参加人数：56名 回答者：36名（回答率：70.6%）

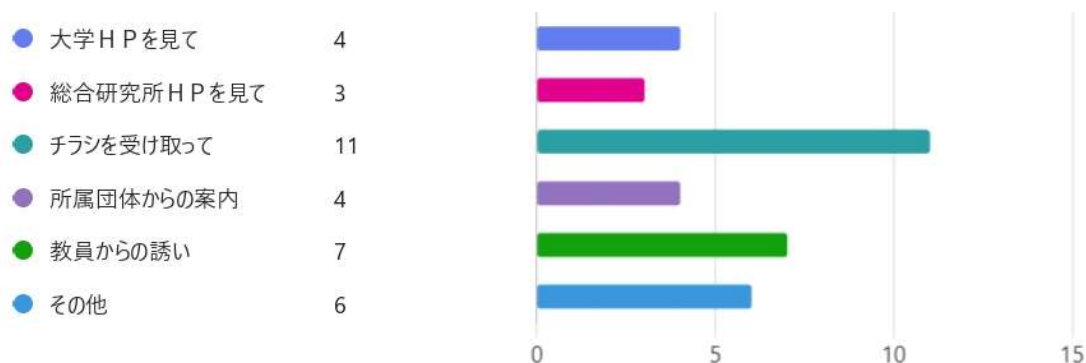
1. 年齢



2. 職業

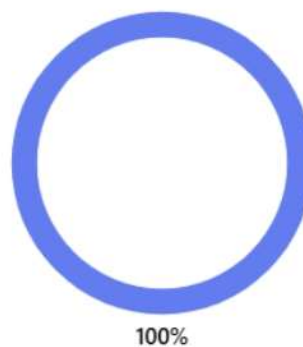


3. 参加の動機



4. シンポジウムの感想

● 良かった	34
● どちらともいえない	0
● 良くなかった	0



聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER

Vol. 35 2025 2025 年 9 月 1 日発行

発行人 小池 茂子

発行所 聖学院大学総合研究所

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎 1 - 1

TEL : 048-725-5524 FAX : 048-781-0421

e-mail : research@seigakuin-univ.ac.jp

HP : <https://www.seigakuin-univ.ac.jp/institution/gri/>

登壇者の職名・所属は実施当時のものを、報告者の職名・所属は刊行時の
ものを用いて記載しています。